

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

平成24年 8月 1日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 理学研究科

職名・学年 修士課程2年

氏名 藤本心太

助成の種類	平成24年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	12th International Symposium on Tardigrada 第12回国際クマムシシンポジウム		
発表題目	Muscular Architecture of Marine Heterotardigrades 異クマムシ綱海産クマムシ類の筋系走向		
開催場所	Vila Nova de Gaia, Portugal		
渡航期間	平成24年 7月21日 ～ 平成24年 7月30日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円	
	使用した助成金額	200,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	学会参加費	19,250 円
		渡航費(航空運賃・鉄道運賃)の一部	180,750 円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

平成 24 年度京都大学教育研究振興財団  
国際研究集会発表助成(II 期)成果報告書

京都大学大学院理学研究科  
修士課程二回生 藤本心太

報告者は、2012 年 7 月 23 日から 26 日にかけてポルトガルのヴィラ・ノヴァ・デ・ガイアで行われた 12th International Symposium on Tardigrada (和訳：第 12 回国際クマムシシンポジウム)に参加し、口頭発表を一件行った。

本シンポジウムは、三年に一度開催される微小な無脊椎動物の分類群の一つであるクマムシ類(緩歩動物門)に関する唯一の研究集会である。今回のシンポジウムは、米国・イギリス・イタリア・ウクライナ・カナダ・コロンビア・スウェーデン・スペイン・スロバキア・チェコ・デンマーク・ドイツ・日本・ブラジル・フランス・ポーランド・ポルトガル・リトアニアの 18 か国から 77 名が参加した。そして、系統分類学・生物地理学・生態学・比較形態学・生理学・バイオインフォマティクスなど、あらゆるアプローチの研究が、口頭発表 35 演題、ポスター発表 39 演題で発表された。

報告者は、二日目の最後の演者として「Muscular Architecture of Marine Heterotardigrades (和訳：海産異クマムシ綱の筋系走向)」というタイトルの発表を行った。本発表は、クマムシ類全体の系統進化を考える上で、最も重要と考えられている海産異クマムシ綱というグループの系統関係を明らかにするため、近年、系統推定の指標になりうると指摘され注目を浴びている「筋系走向」(Schmidt-Rhaesa & Kulesa, 2007; Halberg *et al.*, 2009; Schulze & Schmidt-Rhaesa, 2011)という内部形態形質に着眼し、それを蛍光染色して観察し、比較検討した結果を発表した。発表では、採集が困難なため筋系走向の観察がされてこなかった多くの分類群の筋系走向を報告し、その結果わかってきたクマムシ類の中での筋系走向の進化様式について考察を行った。質疑応答では、R. M. Kristensen 博士から、博士自身が記載した特に希少で報告のほとんどない属の *Renaudarctus* sp. の採集方法と、本発表で明らかになった Halechiniscidae 科内での腹側筋系走向の大きな違いに関する質問を、N. Møbjerg 博士から、筋系走向での系統推定ツールとしての適用範囲に関する質問を、報告者が筋系走向の研究をする上で大変参考にさせていただいている K. A. Halberg 博士から、観察方法に関するコメントをいただき、議論を深めることができた。また、発表が終わってから学会終了までに、海産種の分類に関する質問や、筋系走向に関する質問、クマムシ類全体の系統進化に関する質問などを多く受け、大変意義深い時間を学会で過ごすことができた。

報告者自身の発表に関することの他に、ブラジルでの初の海産クマムシ類の本格的調査の途中経過、米国フロリダ沖から見つかった変わった形態の海産未記載種、ポルトガルから見つかった海産クマムシ類の新属の報告、といった報告者が特に強い関心を寄せている海産クマムシ類に関する多くの新しい情報を目にし、それらの発表者らと情報交換するこ

とができた。また今後の研究で行うことを検討しているクマムシ類の神経の免疫染色の技術について情報を得ることができた。

今回のシンポジウム参加によって報告者は、多くの研究者と交流でき、新しい情報を得ることができた。また口頭発表を行うことによって、自身の研究を強くアピールすることができた。

今後の研究に資するこれらの成果を上げられるように、シンポジウム参加のための助成をしていただきました京都大学教育研究振興財団に心より感謝申し上げます。